

受け入れ準備着々

ILDミーティング

鈴木学長(県立)が説明

次世代の大型加速器「国際リニアコライダー(ILC)」に関連した国際会議「ILDミーティング2018」は21日目の21日、一関市大手町の一関文化センターで初日に引き続き素粒子衝突実験に使用される測定器

「ILD」に関する協議が行われた。東北ILC準備室長の鈴木厚人県立大学長も講師を務め、ILC実現に向けた受け入れ準備の状況について詳しく説明した。

鈴木学長は2016年6月に発足した東北ILC準備室で、地下施設とマスタープランの2専門部会と広報、地域、技術、産業の4部門で受け入れに向けた作業を進めていることを紹介。経済波及効果や国内外への情報発信、地質など各調査、まちづくり・シーリングを

検討した上で、建設実現に向けて日本政府に要望するとした。さらに、建設に当たっては環境に配慮した「グリーンILC」として排熱利用などを進めることや、外国人研究者のためワンストップ・トータ

ル・サービスの検討に入ったことも示した。高沢賢治の「銀河鉄道の夜」になぞらえ、「北上サイトでのILCを宇宙の誕生を探る旅にする」と訴えた。

出席した研究者からはILCのために来日した際の家族の学校、教育環境について質問があり、鈴木学長は日本ではインターナショナルスクールをつくらなかった場合に地元と隔離された状態になって住民らと交わらないケースが多いと、「成功例がほとんどないので、今後対応していかねばならない」と述べた。

最終日の22日は測定器の最適化や物理解析などについて協議する。

国際化進む未来の一関 児童生徒が英語劇

ILDミーティング2018の歓迎レセプションは20日夜、一関市田村町の蔵元レストランせきのいちで開かれた。児童生徒による英語劇などが披露され、研究者らも喜ばせた。

レセプションは初日の議に参加した研究者や勝席。餅など地元の特産食材や地酒などが振る舞

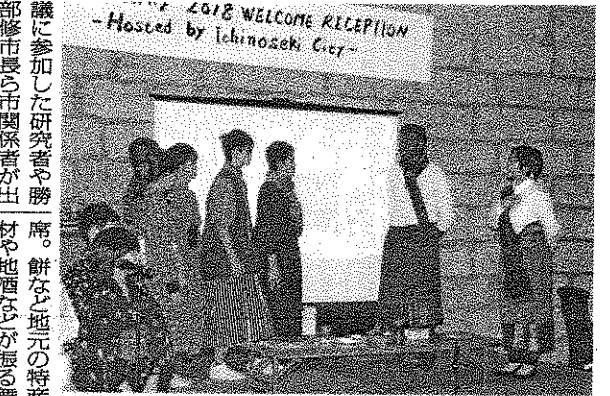
れた。英語劇は山目市民センターの少年事業で2015年度から取り組んでいるもので、市内の小中学生から高校生までと外国語指導助手が参加。一関出身の蘭学者・大槻玄沢(1757-1827年)の偉業を伝える内容で、玄沢が長崎に遊学した様子などをユーモアを交えて演じ、会場に笑いが起る場面もあった。

最後には国際リニアコライダー(ILC)の誘致が実現した2030年次の一関が舞台となり、国際化、科学技術の進歩が現実となった未来が描かれ、ILCの実現を目指す研究者らから盛んに拍手が送られた。

21日夜には晩さん会が同市山目のベリーノホテル一関で開かれた。



ILCが実現した場合の受け入れについて説明した鈴木学長



研究者を前に英語劇を披露した児童生徒ら